
日本列島の文明化をめぐる

—弥生時代から古墳時代へ—

Yayoi to Kofun: Civilization of Japanese Archipelago

白石太一郎

SHIRAISHI, Taichiro

[Abstract] In the latter half of the third century in all areas of Japan, except the north and the south, giant "keyhole" shaped burial mounds were constructed. This can be thought to reflect the formation of a political alliance with the main power residing with the Yamato force in the Kinki region. This group help power over the various areas of the archipelago. It can be thought that cooperation among forces in the Kinki and Setonaikai coastal areas for the purpose of stealing control of the import routes for iron and other advanced culture commodities from the Korean peninsula from the forces in northern Kyusyu was what lead to the formation of this wide-reaching political alliance. The external factor of foreign relations certainly played a great part in the formation of a political world in the Japanese archipelago.

The Yamato alliance that was thus formed became even more civilized. More extreme measures were necessary in order for Japan to join the international society of East Asia. External stimulation due to strained international relations in East Asia between Koguryo and the South after the latter half of the fourth century were what spurred this activity. There were also demands from the kingdoms of Paekche and Kaya and the Yamato nation got into a direct battle with the horse-riding forces of Koguryo. This led to the reception of advanced metal-working skills for the production of weapons and horse-riding culture. It also led to the reception of the culture of Chinese characters as a means of conducting foreign diplomacy and other various cultures and technologies that advanced scholarship and thought. The civilization of the Yamato nation was founded on a definitive maturation of agricultural society, however the results of that independent development were not the sole deciding factor. Strong external stimulus was the key point.

はじめに

わたくしは日本の古墳時代、すなわち3・4世紀から7・8世紀前後の時代を考古学の立場から研究している。今回の国際シンポジウムは、当初「東アジアにおける農耕社会の形成と拡散」というテーマで準備が進められてきた。これは、わたくしの専攻する古墳時代より一段階以前の時代に関する課題である。ところが、いつのまにかテーマが「文明化」にまで拡散し、私も報告をしなければならなくなった。そうしたわけで準備も充分ではないが、与えられたテーマ、すなわち「日本列島の文明化—弥生時代から古墳時代へ—」ということで、この課題についての最近のわたくしの構想の大筋を報告し、批判を仰ぎたい。

なお、ここでは「日本列島の」ということになっているが、今回私が報告するのは、日本列島の

うち、北と南の部分を除く地域、後の律令制度に基づく古代国家の版図に含まれる地域に限定することを、あらかじめ断わっておきたい。

まず最初に、この報告の目的を明確にしておきたい。

日本の考古学では、日本列島にはじめて稲作農耕に基礎を置く農耕社会が形成されたいわゆる「弥生時代」と、その発展の結果各地に巨大な墳丘をもつ古墳が造営されるようになる「古墳時代」を区分している。古代の東アジア世界の中でも、異常ともいえるほど巨大な古墳づくりに熱中した「古墳時代」は、日本列島各地に形成された政治集団相互の間に政治的連合関係が成立し、北と南をのぞく日本列島の中央部が、はじめて一つの政治的まとまりを形成した時代でもある。わたくしの報告の第一の目的は、こうした広域の政治的まとまり、すなわち東アジア世界の中で「倭国」と呼ばれた政治連合が、いったい何を契機に形成されたのかを明らかにすることである。

農耕社会の発展を基礎に、一定の外的刺激をうけて形成された倭国すなわち倭国連合の成立、—それは3世紀の初めのことと考えるが—、この倭国連合の成立は、日本列島の文明化のための政治的・社会的基礎条件が整備されたという意味できわめて重要である。しかし倭国が、さらに本格的な文明化を進め、真に東アジアの国際社会の仲間入りを果たすには、さらなる飛躍が必要であった。

重要なことは、このさらなる飛躍が、必ずしも農耕社会の一定の成熟を基礎とする倭人社会の自律的発展の結果達成されたものではなく、主として東アジアの国際情勢の緊迫という、きわめて強力な外的な刺激の結果にはかならないということである。騎馬文化をはじめ、陶質土器、金銅製品など高度な金属製品の製作をはじめとするさまざまな新しい技術の受け入れ、さらに漢字文化の本格的受容をはじめとする学術や新しい思想の受容など日本列島の文明化の基礎が整備されたのは、いずれも5世紀に始まる外来文化の積極的受容の結果である。わたくしの報告の第二の目的は、この古墳時代の中頃に始まる文明化の契機を明らかにすることである。

1. 倭国連合の形成

まず第一の課題について述べたい。

中国鏡に象徴される先進的文物や鉄器文化、あるいは先進的な技術の受容において、北部九州が日本列島の他の地域に対して圧倒的に有利な立場にあったことは、弥生時代における鉄器や中国鏡が北部九州を中心に分布することからも確実である。それにもかかわらず、その後の日本列島の古代国家が近畿地方の勢力を中心に形成されたことは、この段階の政治秩序と密接な関係をもって造営されたと考えられる古墳のあり方からも疑いなくと思われる。

この大きな矛盾を説明する手段として「東遷説」、すなわち後の古代国家を形成する核となる勢力が九州から近畿地方に移動したとする説が、第2次世界大戦以前から多くの研究者によって唱えられてきた。この説は、『古事記』や『日本書紀』にみられる神話的記述を合理的に説明しようとする近代の合理主義的な歴史解釈の風潮とも一致しており、戦前の日本の思想界に大きな影響を与えた倫理学者の和辻哲郎をはじめ多くの支持者を持っていた〔和辻 1920〕。

しかし最近における弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての土器の移動に関する研究の進展の結果などからも、九州勢力の近畿地方への東遷は考え難いと思われる。すなわち、日本列島の中央部に広域の政治連合が形成される前夜にあたる2～3世紀は、土器の移動が広範に認められる時期

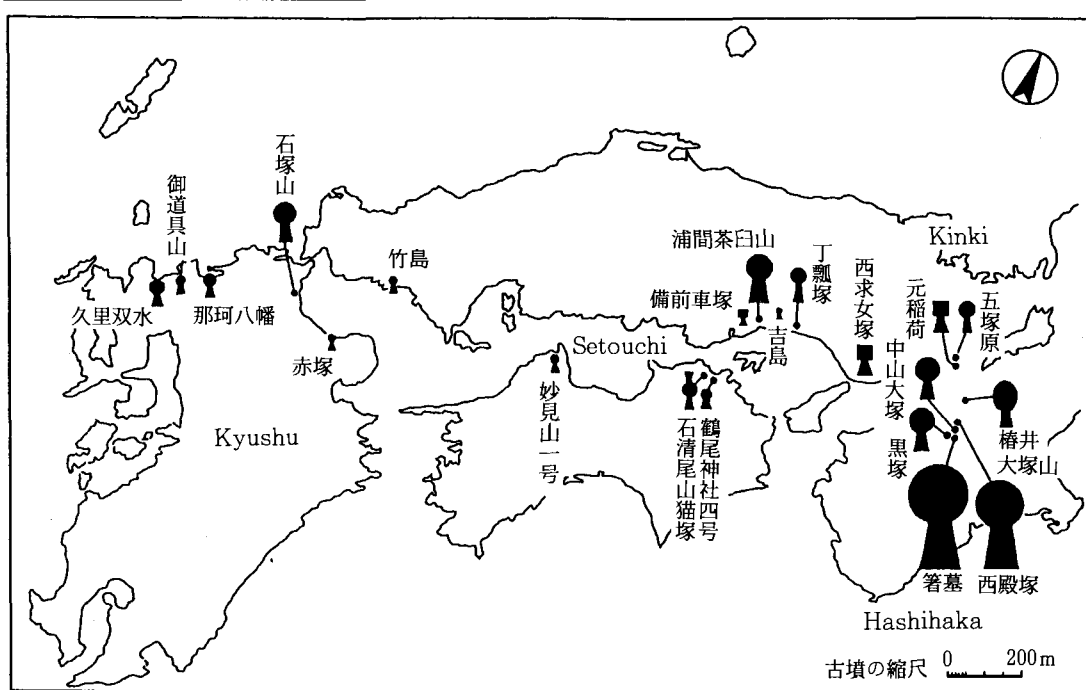


図1 西日本における出現期古墳の分布
Fig. 1 The distribution of the initial Kofun in Western Japan

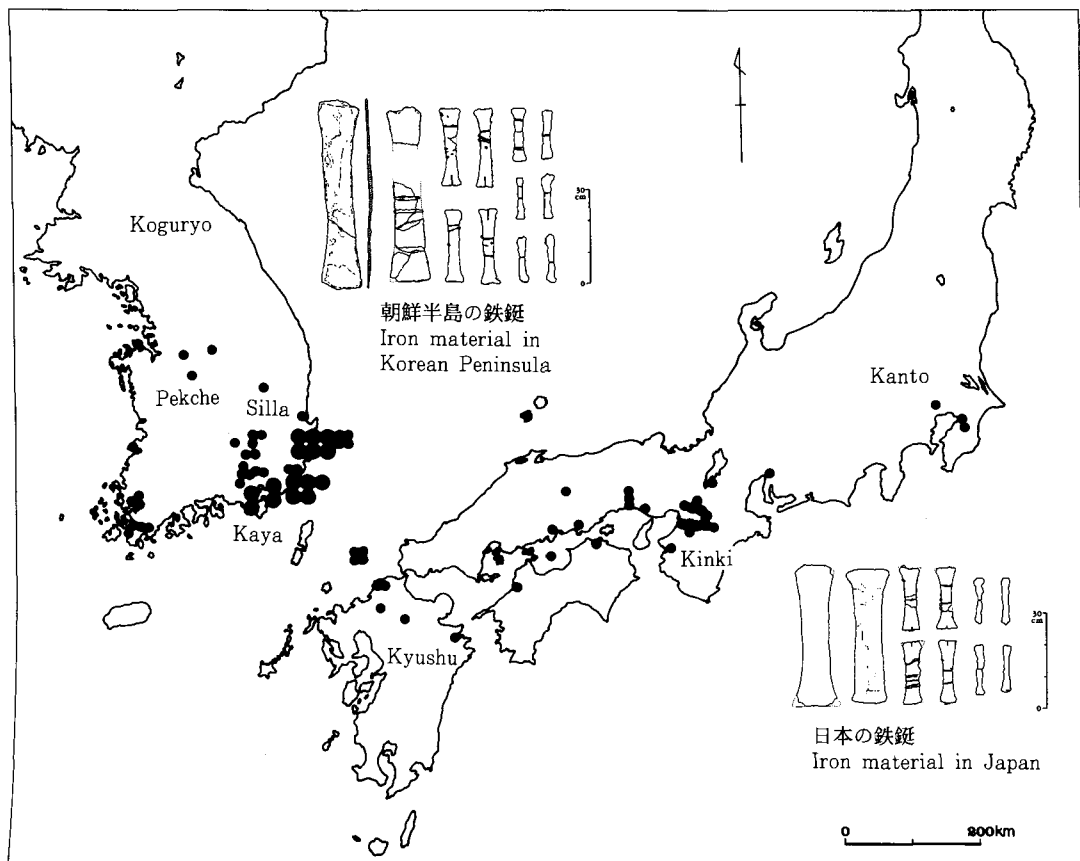


図2 朝鮮半島と日本列島における鉄鋌出土遺跡の分布（・は1遺跡、●は10遺跡を示す。東潮氏による）
Fig. 2 The distribution of the sites discovered iron material in Korean Peninsula and Japanese Archipelago

でもあり、日本列島内における人の動きがきわめて活発になった時期でもある。ところがこの時期、近畿地方や瀬戸内海沿岸各地の土器の北部九州への流入は認められても、その逆に北部九州の土器の東方への移動はほとんど認められないのである〔森岡 1991, 比田井 1991〕。

図1は、3世紀後半の西日本における出現期古墳の分布状況を示したものであるが、この段階には画一的な内容をもつ前方後円墳が近畿地方、瀬戸内海沿岸各地、さらに北部九州などにみられる。きわめて画一的な内容をもつこれらの古墳は、首長連合を形成した各地の首長たちが、その連合内での身分秩序に応じてそれぞれ大小さまざまに営んだものと考えられる〔白石 1999〕。

これらの出現期の古墳の中では、近畿地方の大和に他を圧して大きな古墳があり、これに次いで大きなものが瀬戸内海沿岸の岡山や北部九州でも瀬戸内海側にみられる。それに対し、弥生時代に朝鮮半島との交渉や交易に中心的な役割を果たした北部九州の玄界灘沿岸にはあまり有力な古墳はみられない。

一方、こうした古墳の出現期には、中国からもたらされた鏡の分布状況にもきわめて大きな変化が生じる。弥生時代には圧倒的に北部九州に集中していた中国鏡が、古墳時代になると、その分布が近畿地方を中心とする分布に急変する〔岡村 1986〕。

また、日本列島では弥生時代の後期、すなわち紀元1世紀頃から本格的な鉄器の時代に入ったと考えられているが、なぜか弥生時代後期や古墳時代前半期の確実な製鉄遺跡の存在は知られていない。この時代に日本列島で消費された大量の鉄器の原料がどこから調達されていたかを、考古学的、あるいは自然科学的に明らかにする研究は必ずしも進んでいるとは言えないが、中国の歴史書『三国志』の東夷伝が伝えるように、倭人が朝鮮半島東南部の弁辰の鉄を輸入していた可能性はきわめて大きいと考えざるをえない。

図2は、東潮が作成したもので、4世紀後半から5世紀代の韓国南部や日本列島の古墳から出土する鉄鋌と呼ばれる鉄の延板を出土した遺跡の分布を示したものである〔東 1987〕。一部の韓国の研究者や村上恭通が指摘するように、この鉄鋌を普遍的な鉄素材と考えてよいかどうかについては、さらに検討が必要であろう〔村上 1998〕。ただ、鉄鋌の貨幣的な意味が大きかったとしても、そのこと自体が、本来的に鉄素材としての貴重性によるものであることを認識する必要がある。こうした4～5世紀における鉄鋌の分布のあり方は、4～5世紀になっても、日本列島で用いられる鉄資源の多くが朝鮮半島東南部弁辰、すなわち加耶のものであったことを象徴的に示しているもの、と解釈して差し支えなからう。

その場合、朝鮮半島東南部の弁辰の鉄の入手に最も重要な役割を果たしていたのが伊都国、奴国など北部九州の玄界灘沿岸の勢力であったことは、鉄器や中国鏡など先進文物の出土量のこの地域への圧倒的な偏りからも疑いない。したがって、より東の瀬戸内海沿岸各地や後にのちに畿内と呼ばれる近畿中央部の勢力が鉄資源の安定的な入手を確保しようとする、玄界灘沿岸地域との衝突は避けられなかったものと思われる。

こうしたいくつかの考古学的な状況から、わたくしはそれまで北部九州の玄界灘沿岸の勢力が独占的に掌握していた朝鮮半島東南部の鉄資源や中国鏡をはじめとする先進文物の輸入ルートへの支配権を奪い取るため、近畿から瀬戸内海沿岸各地の勢力が大和の勢力を中心に連合したのが、広域の政治連合形成の契機になったものと考えている〔白石 1999〕。こうして成立したのが畿内の大和

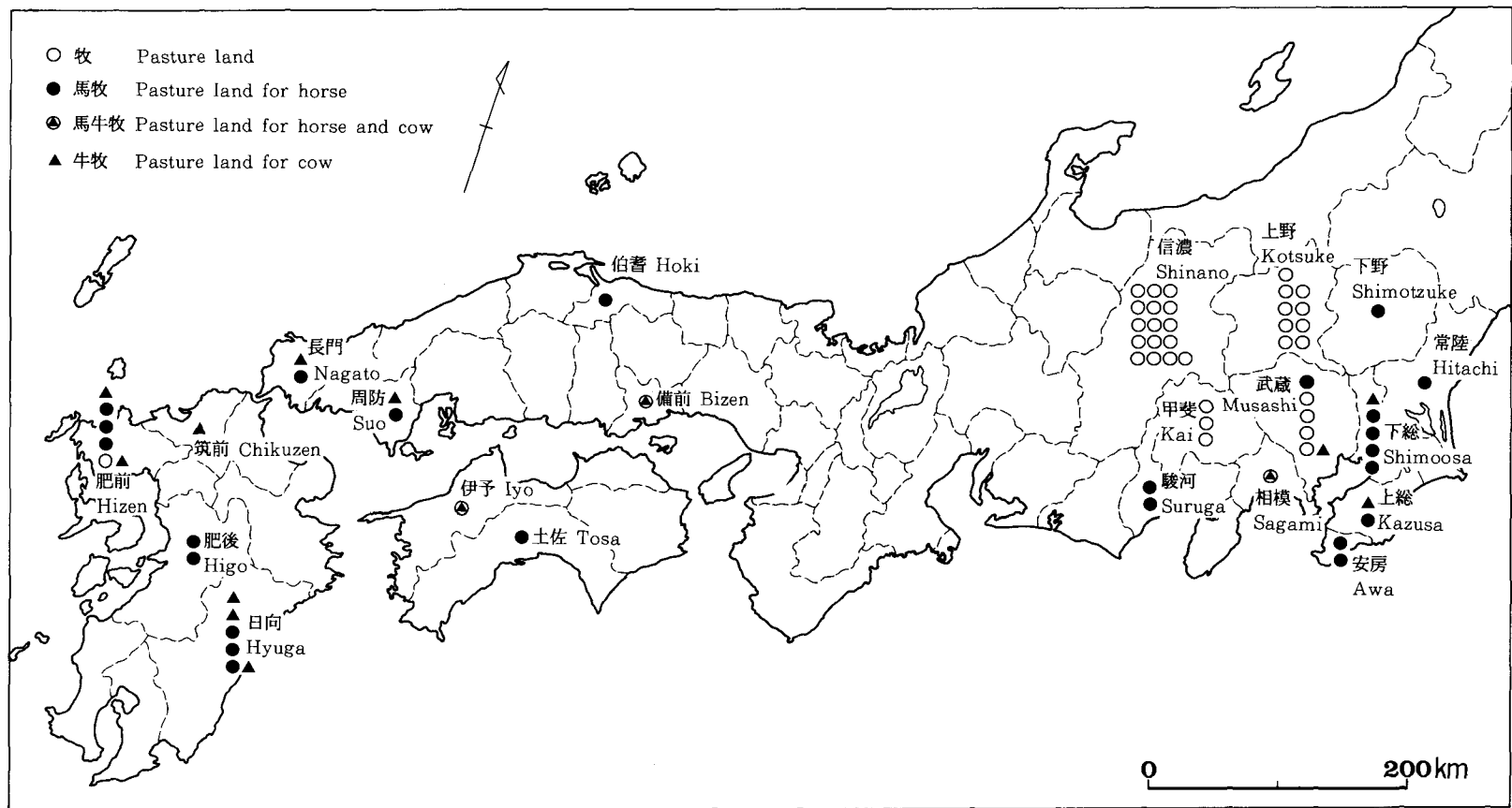


図3 『延喜式』にみられる牧の分布
Fig. 3 The distribution of the *Maki* by *Engi-Shiki*

を中心とする政治連合、すなわちヤマト政権にほかならない。

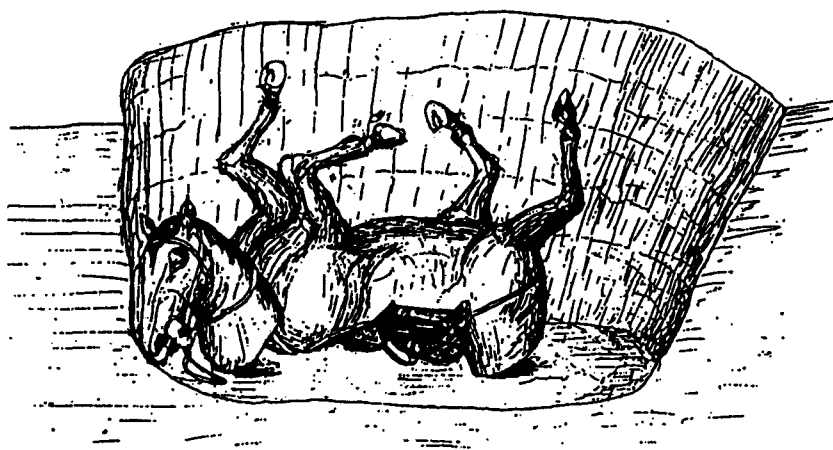
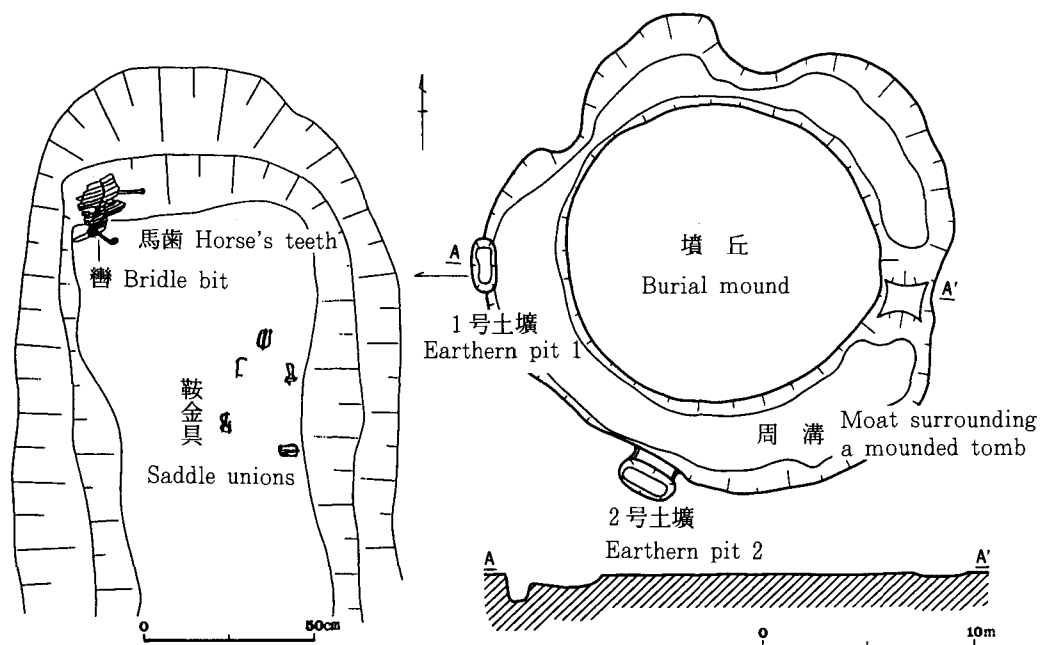
この玄界灘沿岸地域と畿内・瀬戸内連合との争いの時期は、中国鏡の分布の中心が北部九州から畿内に移る3世紀初頭のことであろう。この争いが『魏志』倭人伝にみられる「倭国の乱」に相当する可能性は大きい。ただその時期については『後漢書』のいう「桓霊の間（桓帝・霊帝の間）」や『梁書』の「漢の霊帝の光和中」の記事から2世紀後半に求める説が多いが、『後漢書』や『梁書』の記載にオリジナリティがあるかどうかははなはだ疑問である。畿内を中心に分布する最初の鏡が三角縁神獸鏡直前の画文帯神獸鏡であることから、その争いは3世紀の早い段階に求めるべきであろう。

一方、最近では図1に示した出現期の大型前方後円墳の中でも古い段階の古墳の造営年代が、3世紀後半の中でも古い段階、すなわち3世紀中葉すぎまで溯るものとする研究者が次第に多くなってきた。このことは、古墳造営の背後にある連合政権としてのヤマト政権は、中国の『三国志』の中のいわゆる『魏志』倭人伝にみられる邪馬台国を中心とする小国連合からストレートに繋がるものと考えて差し支えないと思われる。もちろん3世紀前半の邪馬台国連合の段階と3世紀後半以降の初期ヤマト政権の段階とでは、その政治連合に加わる国々の範囲や連合の性格にも大きな変化があったことが想定されるが、ここでは省略する。

このように3世紀前半に成立していた邪馬台国連合やそれにつながるヤマト政権と呼ばれる政治連合こそが、東アジア世界で「倭国」と呼ばれたものの実態であり、そこではその連合の盟主である近畿の大和の王が「倭王」として外交権を一手に掌握していた。これはこの政治連合がその成立の契機からも、海外の先進的文物の共同入手機構にほかならず、大和の首長はそのリーダーとして外交権を各地の首長から承認されていたものと考えられる。まさに海外の先進的文物や情報の入手ルートの支配権をめぐる確執こそが、日本列島における広域の政治連合の形成の直接的契機になったものと、わたくしは考えている。

なお最近、こうした加耶の鉄の入手ルートの支配権をめぐる確執を日本列島における広域の政治連合形成の契機と考える説に対する批判も少なくない。ただその多くは、弥生時代後期～終末期における鉄器保有や鉄器生産技術にみられる北部九州の圧倒的優位から、畿内・瀬戸内連合の北部九州制圧など考え難いとするものである。わたくしは、弥生時代における北部九州の鉄器保有の圧倒的優位をそのまま認めたくて、それにもかかわらず古墳時代に入ると畿内の古墳に大量の鉄器が副葬されるという考古学的事実、さらに大和を盟主とする政治連合が形成される歴史的事実を、最も合理的に説明しうる仮説としてこの考えを提起しているのである。大和を中心とする広域の政治連合の形成を、最近の考古学的研究の成果とより整合的・合理的に説明しうる説が提起されないかぎり、この考えを撤回するわけにはいかない。

ところで都出比呂志は、この3世紀後半における広域の政治連合の成立を、日本列島における初期国家の成立ととらえている〔都出 1991〕。ただわたくしは、この段階はまだ首長連合的な性格が顕著であること、また首長たちの結合原理が、古墳の造営に顕著にみられるように、擬制的血縁関係を媒介とした身分秩序を基礎としているらしいことなどから、むしろ新進化主義者らのいう首長制社会のイメージに近いと考えている。



1号土壇における馬の殉葬の想定図

図4 千葉県大作31号墳にみられる馬の殉葬土坑 (イラスト: 岩永省三)
Fig. 4 The earthen sacrificial pit at Ozaku1, Chiba Pref. : illustrated
by IWANAGA Shozo

2. 倭国の文明化への外的刺激

次に第二の課題、すなわち5世紀以降における日本列島の文明化の契機の問題に移りたい。

倭国への鉄資源や先進的文物、さらに情報の輸出・発信基地となったのは、朝鮮半島東南部の、弁辰ないし弁韓、のちに加耶と呼ばれた地域であることは、最近の韓国における考古学的な調査・研究の成果からも疑いない。特に加耶諸国の一国、金官加耶では、その王墓と考えられる金海市大成洞古墳群の発掘調査が行われ、多くの倭系遺物が出土したことから、3～4世紀における彼我の交流の実態がより明確になった。またこの大成洞古墳群の調査などから、加耶では4世紀初頭にはすでに馬具や騎馬文化が広範に受容されていたことが明らかにされた。ところが不思議なことに、4世紀の倭人たちは、馬匹や騎馬文化にはまったく関心を示さなかったようで、日本列島の4世紀代の古墳には馬具の副葬はまったく認められない。ところが5世紀に入ると、倭人たちは競って騎馬文化を受容するようになり、古墳の副葬品にも馬具が加わるようになる。

また、本格的な馬匹生産のため、5世紀には大規模な牧が東日本にまで多数設置されたことが、最近の考古学的な調査・研究の進展にともなって想定されるようになってきた。10世紀のはじめにまとめられた『延喜式』には、古代の律令国家が直接管理していた牧のリストがみられる。図3は、その分布を示したものであるが、注目されるのはそれら古代の牧の想定地の付近の5世紀代に溯る小古墳の周囲から馬の殉葬土壙が多数発見されていることである。図4は、やはり古代に多くの牧が設置された下総の千葉県佐倉市大作31号墳の周溝に接して営まれた馬の犠牲土壙の図である。ここでは馬の歯や鞍金具の出土状況から、それが馬の犠牲にともなうものである可能性が大きいことが指摘されている。本来馬を飼育する風習を持たなかった倭人の間に馬の犠牲の風習が生じたとは考え難いから、これらは牧の設置にともなって列島の各地に移住した渡来人が持ち込んだ習俗と考えるほかない。『延喜式』にみられる牧の想定地の近くの古墳から5世紀の馬の犠牲土壙が数多く検出されている事実は、これらの牧の設置が5世紀まで溯ることを示唆するものにほかならない。

『延喜式』にみえる信濃の大室牧に関連すると思われる長野市大室古墳群には、5世紀の合掌形石室と呼ばれる竪穴系横口式石室が数多くみられる(図5)。合掌形石室は7世紀の百済にもみられ、今のところ彼我の年代差は大きいですが、こうした倭国における大規模な牧の設置が百済などの技術援助で行われたことと関連するものであろう。これについては土生純之の批判があるが、私は百済のものが新しいことを承知の上で、それが高句麗でもなく、新羅でもなく百済にあることの意味に注目しているのであって、その批判はあたらない〔土生田 2000〕。これらのことは、この時期の牧の設置が百済や加耶の技術援助をうけて行われた国家的規模のものであったことを示すものであろう。

また図6に示すように、日本列島の初期の馬具はいずれも加耶のものと共通している。この時期の百済の馬具の実態については、必ずしも明らかではないが、日本列島における初期の馬具の提供やその製作には金官加耶など加耶諸国や百済の援助があったことは疑いないと思われる。

こうした騎馬文化の受容の背景には、4世紀後半以降の高句麗の南下という東アジアの国際情勢の大きな変化があることはいうまでもなからう。この高句麗の南下は朝鮮半島南部の百済や新羅、さらに加耶諸国にとっては、まさに国家存亡の危機であり、また重要な鉄資源や先進的文物の入手

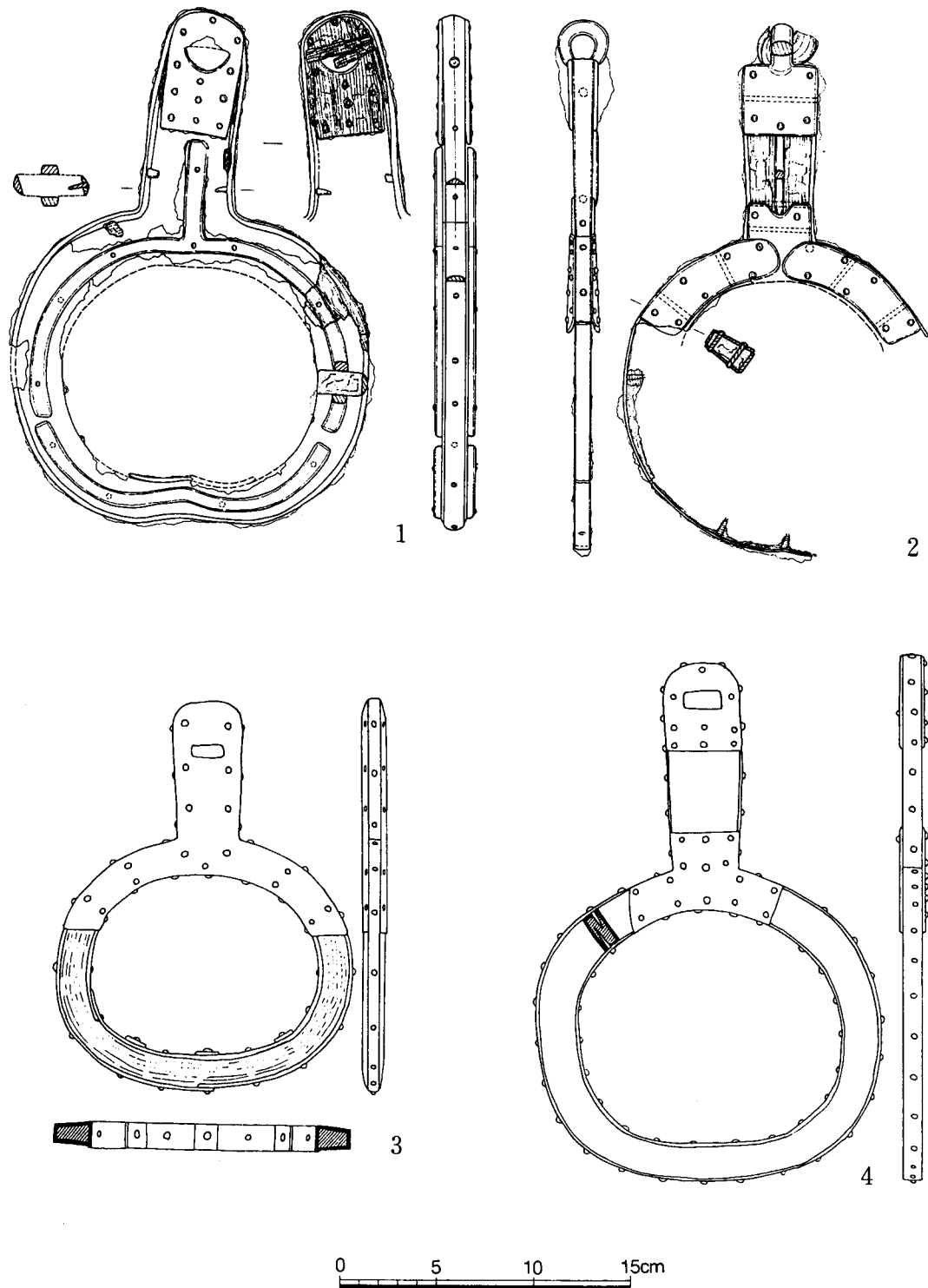


図6 日本の初期の鐙と加耶の鐙 (1・2 加耶福泉洞22号墳、3 滋賀県新開1号墳、4 大阪府七観古墳)
Fig. 6 The initial stirrups discovered from Japan and Kaya: 1. 2: Pokch'on dong 21 Pusan, 3: Shingai 1 Kofun, Shiga Pref. 4 Shichikan Kofun, Osaka Pref.

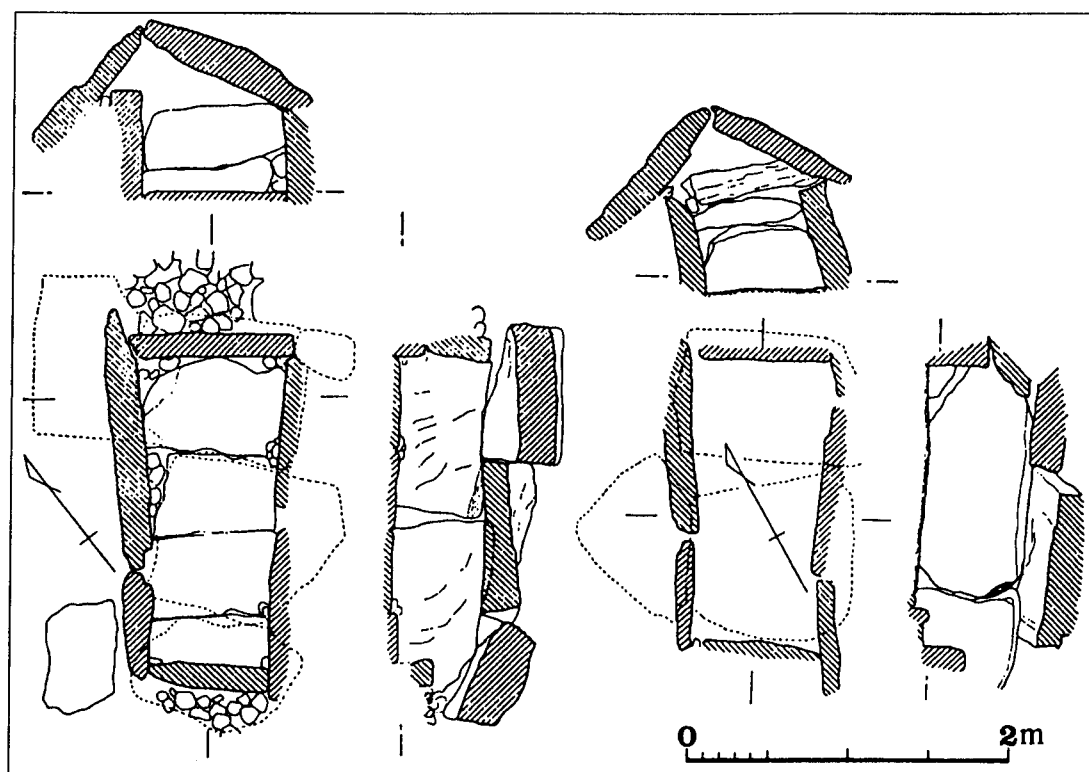


図5 長野県大室古墳群の合掌形石室

Fig. 5 The triangle-shaped roof style of stone chamber Omuro kofun-gun at Nagano Pref.

を朝鮮半島にたよっていた倭国にとってもそれは重大な危機にほかならなかったと思われる。さらに高句麗が海を渡って日本列島に攻めてくる可能性も想定されたのではなからうか。

『百濟記』によったと考えられる『日本書紀』神功46年丙寅（366）年に始まる一連の記事に、加耶の一国卓淳国（最近では沿岸部の昌原とする説が有力である）の仲介によってはじめて百濟と倭国の国交が始まったことが記されている。このことは、高句麗の南下という東アジアの国際情勢の大きな変化に対応して、倭と朝鮮半島諸国との交渉が加耶以外にも拡大したことを示すものとして重要である。特にそれが加耶の一国の仲立ちにより始まったことは、倭の対外交渉において加耶が果たした役割を具体的に物語るものとしてきわめて興味深い。こうした国際的な大きな危機に直面して、倭人たちはそれまでまったく関心をもたなかった騎馬文化を否応なしに受容するようになるのである。これを援助したのも、やはり高句麗の南下という大きな危機に直面していた加耶諸国や百濟であった。

この大きな危機を契機に、馬匹の生産・飼育技術ばかりでなく、馬具の生産に関連して金属加工、皮革、木工などさまざまな技術や陶質土器の生産技術、さら本格的な漢字文化や学術・思想までもがもたらされることになる。5世紀には、倭人たちは渡来人の智恵をかりて、漢字を用いて自分たちの人名や地名を表記するすべを身につけるようになった。このことは埼玉県行田市稲荷山古墳出土の稲荷山鉄剣や熊本県菊水町江田船山古墳出土の江田船山大刀など銘文をもつ刀剣の銘文から明らかである。

こうした倭国の急速な文明化は、まさに高句麗という北からの軍事的圧力に対抗するための百済や加耶諸国の外交政策の一部でもあった。またこうした朝鮮半島における動乱を逃れて少なくない渡来人が日本列島に渡来し、騎馬文化以外にもさまざまな技術・情報・文化をもたらしたこともいうまでもない。わたくしは、このような外的刺激、あるいは外圧こそが、倭国の文明化の最大の契機となったと考えている。

なお、世界観や宗教の問題には、いま詳しく触れることは出来ない。ただ、最近の奈良県における考古学的調査の結果、桜井市吉備廃寺が7世紀前半の舒明朝に営まれた大王家の氏寺であり、かつ国の大寺である百済大寺にほかならないことが明らかにされた〔佐川 1998〕。ここでは、一辺30mの基壇の存在から、おそらく数十mの高さの九重の塔の造営が想定されている。この寺はのちに移転して大官大寺と呼ばれるようになることから明らかなように、国家によって建設された最初の仏教寺院である。

6世紀後半、中国では二百数十年ぶりに隋が全土を統一、さらに7世紀前半には唐がそれに代って強大化し、朝鮮半島諸国に大きな脅威を与える。この時期、新羅では皇龍寺の九重の塔が80mの高さを誇り、また百済でも益山の弥勒寺に九重の塔が建てられたことが知られている。百済大寺の九重の塔が、こうした新羅や百済の国家的大寺院に対する対抗意識が生み出したものであることは明らかであろう。日本列島では仏教の受容も、外的刺激や対外緊張の産物にほかならなかったのである。

ま と め

このように、日本列島における文明化の進展は、農耕社会の一定の成熟を基礎としつつも、決してその自律的発展の結果もたらされたものではない。それは明らかに強力な外的刺激ないし圧力を契機とするものである。

このことは日本列島が、古墳に象徴される首長連合体制から脱皮して中央集権的な律令制古代国家を7世紀末葉に形成したことについても例外ではない。6世紀後半の隋による中国の統一にともなう朝鮮半島情勢の緊迫化が、前方後円墳の造営停止をも含む推古朝の諸改革をもたらす。また663年の白村江の戦いにおける、百済・倭の連合軍の唐・新羅の連合軍に対する敗北とそれにとともなう危機意識が、律令制的な国家システムの形成を促す直接的な契機となったことは多くの研究者の指摘するところである。

中国の高文明の周辺に位置する日本列島の文明化や国家形成の特質についてのわたくしの理解は、大要以上のようなものである。まさにトインビーのいう「挑戦と応戦」Challenge and Responseの論理がそのまま適用できよう。まさに朝鮮半島の文化や中国文明との「遭遇」Encounterこそが、日本列島の文明化をもたらしたということができるとはなからうか。

今回は触れられなかったが、こ朝鮮半島や中国文明との「遭遇」を意味あるものとするには、受け入れ側の日本列島の内的条件や社会の成熟度が問題となることはいまでもなからう。今後これらの問題を含めて、倭の国家形成や文明化についてより検討を深めていきたい。

引用文献

- 東 潮 1987「鉄鋌の基礎的研究」『考古学論叢』12, 奈良県立橿原考古学研究所, 70~179頁。
- 岡村秀典 1986「輸入青銅器-中国の鏡-」『弥生文化の研究』6, 道具と技術, 雄山閣出版, 69~77頁。
- 佐川正敏 1998「吉備池廃寺の調査-第89次」『奈良国立文化財研究所年報』1998-II, 58~68頁。
- 白石太一郎 1999「古墳とヤマト政権-古代国家はいかに形成されたか-」文春新書。
- 都出比呂志 1991「日本古代国家形成論序説-前方後円墳体制の提唱-」『日本史研究』第343号, 5~39頁。
- 土生田純之 2000「積石塚古墳と合掌形石室の再検討-大室古墳群を中心として-」『福岡大学総合研究所報』第240号, 131~154頁。
- 比田井克仁 1991「土師器の移動-東日本-」『古墳時代の考古学』6, 土師器と須恵器, 雄山閣出版, 238~244頁。
- 村上恭通 1998年『倭人と鉄の考古学』青木書店。
- 森岡秀人 1991「土師器の移動-西日本-」『古墳時代の考古学』6, 土師器と須恵器, 雄山閣出版, 229~237頁。
- 和辻哲郎 1920『日本古代文化』岩波書店。